

一人ひとりのいのちが輝くために

加藤美紀

皆さんは日頃の生活のなかで、「生きる意味」について考えることはありませんでしょうか。私は生きる意味を研究テーマにしているので、ゼミでは必ず人生の意味や生まれてきたことの意味について取り上げます。二年前でしたか、九月半ばに当時のゼミ生十四名と一緒に蔵王に合宿に行きました。ゼミでは前期にフランクルの『夜と霧』を輪読して、生きる意味の理論について学んだので、合宿でも「生きる意味」をテーマとして各自二十分の持ち時間、その後十分間の質疑応答という時間配分で発表してもらいました。まるで学会のような形式なので、果たしてみんな大丈夫だろうかと少し不安でしたが、やってみるとこちらの心配をよそに、ゼミ生全員がすごくよく準備できて面白い発表が続き、議論にも花が咲いて、内容の濃い合宿になりました。合宿ではいつものゼミにも増して、それぞれが自分の人生について熱く語ってくれました。たとえば、これまでの人生で影響を受けた人物、人生観や価値観を変えた出会いや体験、挫折やネガティブな体験をどのように乗り越えてきたか、生きるうえで大切にしたいこと、ふとした瞬間に感じる幸せ、生き生きと輝くことのできた瞬間、などなど……。ゼミの皆さんが熱心に語っている姿を見て、私は本当に一人ひとりの幸せを心から願わずにいられませんでした。

ここで質問です。皆さん、本学のHPや入試広報のパンフレットに出てくるキャッチフレーズを覚えていますか？「一人ひとりのいのちが輝くために」という言葉です。実はこれを提案したのは私です。二〇一二年度から本学の

教育理念を表すコピーを新しくつくろうという流れになって、学内で募集した結果、こちらを採用していただきました。このコピーを考えたとき私の頭にあったのは、次の言葉でした。古代の神学者、聖イレネオの言葉で、「神の栄光とは、人間のいのちの輝きである」「神の栄光とは、生きている人間である」というものです。私の理解では、この言葉の意味は、人間のいのちが輝く瞬間に神の栄光が現れる、ということだと思います。前提には、人間のいのちが神の似姿として造られている、という聖書の人間観があります。神様に似たものとして造られた人間の輝き、人間が造られた本性を十全に発揮して幸せに満たされる輝き、そういういのちの輝きこそが神とはどのような方を現しているのだ、という意味だと思います。つまり、自力だけを頼りとして自分のできることを増やしていく、要するに自己完結的に自己実現する、というようなギラギラした輝きとは違って、人間が自らの存在根拠との関わりを深めて自己超越していく透き通るような透明な輝きをイレネオは言っていると思います。でもそんなこといちいち説明できませんから、このキャッチコピーも、どちらかというと自己実現の輝きと受け取られているだろうなと思います。

もちろん自己実現はとても大切なことです。自己実現でまず思い出されるのは、ヒューマンスティック・アプローチで有名な心理学者マズローの自己実現理論だと思いますが、同じ人間性心理学派のロジャーズらも人間のもてる可能性を最大限に発揮する自己実現傾向が誰にも備わっている、という前提のもとにカウンセリング理論を構築しました。ロジャーズの理論は日本のカウンセリングの主流になっていたので、人間の可能性や個性をいっぱい伸ばしてクライアントさんの自己実現を援助するという考え方のもとに心理療法を行っているカウンセラーは多いかもしれません。ケア理論の必読書とされる哲学者メイヤロフも対人援助、つまりケアの本質とはその人の成長と自己実現を助けることだと述べています。日本の教育界でも一九九七年の中教審答申で、教育の使命は生徒の自己実

現を援助することであると明記されてから、よくこのワードが使用されるようになり、自己実現が心理学でも福祉学でも教育学でもキーワードの一つになっている感があります。

自己実現が大切であるという点に異論はないのですけれど、人間は自己実現に終わらないもっと崇高な存在だと思います。聖書の人間観からすれば、私たち一人ひとりのいのちが輝くのは自己実現する以上の価値があります。そこで、人間のいのちが輝く根拠についても考えておきましょう。それがカトリック大学ならではの教育の独自性でもあるからです。カトリック教育に不可欠な要素として「人格教育」つまり、人間の尊厳を大切にし、一人ひとりのかけがえのない人格を慈しんで育む、という特徴があります。カトリック教育が人格を尊重する根拠は、端的に言えば、人間が神の似姿として創造された聖書が伝えている点にあります。では神の似姿とは何でしょうか。旧約聖書の第一番目の文書、「創世記」にはアダムという人類最初の人間の創造の場面で次の言葉が出てきます。

「我々にかたどり（ツェレム）、我々に似せて（デムート）、人を造ろう」創世記一章二六節

「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された」創世記一章二七節

ここで字義的な意味を解説すると、「かたどり」と訳されているツェレムというヘブル語は、ラテン語ではイマゴ・デイ (Imago Dei) と翻訳されていて、「神の像・かたち」を表すそうです。同じ節にある「似せて」と訳されるデムートというヘブル語は、ラテン語ではシミリトゥード・デイ (Similitudo Dei) と翻訳されていて、「神の似姿」を意味するそうです。これではまだ似たり寄ったりで違いがはっきりしません、どこが違うかということ、イマゴ・デイは自然的賜物なのに対して、シミリトゥード・デイは超自然的賜物だということです。神

様について普段考えたことのない方は、「それがなんだ？」という感じだと思いますが、ここからが重要なので、もう少々お付き合いください。この両者の違い、つまり、イマゴ・デイとシミリトゥード・デイの違いをめぐって、結局、神の似姿とは何なのか、私たちが人間が神に似せて造られているとはどういうことなのか、については、似像性の神学という分野もあるくらい古来、神学者の間で様々に議論されてきました。私はその昔、函館のトラピスチヌ修道院で教父学の先生から似像性の神学について教わったとき、大変興奮してわくわくしたことを覚えています。似像性の神学の議論を簡単にお伝えすると、さきほど名前が出てきた聖イレネオ（135頃-200頃）は、二世紀に現在のトルコで生まれ、後に現在のフランスのリヨンの司教様になった神学者ですが、イレネオは神の似姿を「Imago Dei神の像」と「Similitudo Dei神の似像」との対比として捉えました。人間の原罪によって神の似像または模像（Similitudo Deiの類似性）は壊されたが、神の像（Imago Dei）は人間存在に永久に刻まれている。そして、いったん壊されてしまった似像のほうも洗礼を受けることによって完全に回復できると考えたのです。三世紀になるとギリシャ教父オリゲネス（182-251）が次のように考えます。「Imago Dei神の像にかたどられた人間は、Similitudo Dei神の似像の完成に向けて進むべき」であると。これはイレネオの考え方を継承していることとみることができでしょう。ちなみにオリゲネスには「神は根である」、つまり、神は私たち人間の存在の根っこにあって私たちは大きな存在の拠り所を皆もっているのだから、安心して生きていけばいい、という意味のことを言っています。神様は人間が悪いことをしないか見張っているのではなくて、どんなときも私たちの大地のように存在の奥に根を張っているから、めったやたらなことでは人間は揺らがらない、大丈夫だよ、というポジティブなメッセージですね。そういう安心感のなかで元々私たちに備わっている神性を取り戻していけるのだよ、と励ましてくれているのです。

一人ひとりのいのちが輝くために

四〇五世紀に現れたラテン教父の聖アウグスチヌス(354-430)は、似造性の神学に新しい局面を開いたといえるでしょう。この方の書いた『告白』はいわば最古の自分史ともいえるもので、この間、神戸に出張した行き帰りに二十五年ぶりくらいに読み直してみましたが、占星術に凝ったり、マニ教に染まったり、とても興味深いパーソナリティーで、本当に面白くて夢中になって読めました。皆さんにも是非お勧めの「青春の一冊」です。このアウグスチヌスはキリスト教に限らず思想界の発展に大きな影響力を及ぼした人物ですが、神の似姿についても別の点に着目しました。

皆さんも気づかれたでしょうか？神がご自分にかたどって人間を造られたとき「我々にかたどり」「我々に似せて」と語っています。神は一人称ではなく複数形で語るのです。この表現から神様がただちに三位一体のペルソナだと言うのは飛躍があるかもしれませんが、こうした神の我々性、つまり、他者と相互に交わる者として神は働く、いわば交わる存在者としての、関係能力、他者と関わり合う力、言ってみれば「愛する能力」こそが神に似せて造られたものなのだとアウグスチヌスは考えたようです。もっとも、「我々」と自認する神の三位一体のペルソナが何らかの形で人間に印されている、ということから、神に似ている人間の性質とは、靈魂の不滅性を指すという考え方もありますし、理性や自由意志などの霊的能力、精神的特質、精神的能力を指しているとみる考えもあります。なるほど、その場合も、「愛はとこしえに滅びることがない」という新約聖書のパウロの言葉や、「愛と愛の造りあげたものは永久に残る」という第二バチカン公会議の四大文書の一つ、現代世界憲章の思想にも合致します。

これはプロテスタント神学でもみられる考え方です。たとえば、パウル・ティリッヒ(1886-1965)は、人間が神との愛の関係をもつことができることに神の似姿を見ました。カール・バルト(1886-1968)の場合は、神と人

間との関係について、愛という言葉は使わずに少しニュアンスを変えて、応答責任という点を強調します。「神から語りかけられる汝として、神に応答する責任をもつ私」こうした語りかけへの応答責任をもつ、交わりに開かれた人間存在として神の似姿を捉えました。

最後に、私が専門に研究しているユダヤ教徒のフランクル (1905-1997) は、神の似姿をどのように捉えたかをお話して締めくくりたいと思います。フランクルの人間観を探る鍵を握るのが「人格についての十題」という論文です。フランクルが三十代だった頃の一九四〇年代の初期論文から八十歳を越えた晩年の論文に至るまで約五十年間にわたって修正を重ねた論文ですから、フランクルがいかに入れ込んでいたかが分かりますし、ライフワークの一つだったといえるほどで、これがフランクルの人間観の本質を表すものであると言いきれます。この「人格についての十題」は「人格は精神的なものである、人格は実存的である、人格は統一体である……」などと続いて、締めくくりである最後の第十番目に述べているのがまさに「人格はただ神の似姿としてのみ理解しうるものである」という人間観なのです。フランクルは人格のラテン語ベルソナという言葉の語源を説明するなかで、ベルソナとは鐘が鳴り響くことに由来する言葉であるとして、では、鳴り響く鐘とは何なのか、それは超越者の呼び声であると述べます。「超越者からの呼びかけが鳴り響き渡る程度にに応じてのみ人格である」これはフランクルが好んで語っていた言葉です。人間は良心において超越者からの呼びかけを聴き取る、超越者からのみ人間を理解できるというのがフランクルの根本的な人間観です。

少し残念な気もしますが、実は、フランクルは生涯改訂を重ねる過程で、初期論文の「神の似姿」の言葉を削除し、後年は「超越者」を「超越」に書き換えてしまいました。これはフランクル思想がアメリカを中心に世界中に普及していく過程で、ユダヤ・キリスト教的文化圏以外の様々な宗教的背景をもつ人たちに配慮して、あくまでも

哲学からいえることだけを厳密に書いた結果でしょうが、彼自身は晩年に至るまで、まぎれもなく、「超越者から呼びかけに応える人間」「応答する実存」という本質に「神の似姿」を見ていたはずだ。

あくまでも聖書にある「神の似姿」という言葉にこだわっていた私は、二〇一五年に帰天された本学の名誉教授の岩田靖夫先生にも質問をぶつけたことがあります。それは二〇一二年度の大学の教職員クリスマス会の席上のこととで、たまたま大哲学者と隣合わせるという幸運を逃したくなかった私は、パーティーの席で場違いとは思いましたが、次のように尋ねてみました。「人間が神様に似ているって聖書に書いてありますけど、一体それはどことがどういうふうに似ているんでしょうか?」。すると大変誠実であられた岩田先生は、いつものように全くごまかさずに「神の似姿っていうのはさ、人間が自由な存在だっていうことだよ」とまっすぐに答えてくださって、大変感動した覚えがあります。あの答えには本当に嬉しくなりました。人間が自由であるとは、超越の呼びかけ、語りかけにかようにでも応答してよいという自由ではないでしょうか。ロボットやマリオネットなら操られるがままに動かされるばかりで、そもそも応答できないので、命令されることはあっても、呼びかけられたり語りかけられることもありません。私たち人間が自由な存在として造られている、そのこと自体に創造主の最大の愛を感じます。

あのとき、私のゼミ合宿に参加してくれたメンバー全員が、それぞれの人生を手探りで充実させようともがいていることに心打たれました、思わず伏し拝みたくなくなるくらい自由な存在として造られている人間として、これからの人生も生きる意味を求め続けてほしいと今も切に願っています。

(グローバル・スタディーズ学科准教授)